



毒多楚きただの

咳風邪の神さま

先月は天候不順が続いたせいも、調子を崩され、いま咳風邪に罹る方が多いそうです。そんな咳ですが、平安時代の『今昔物語集』に咳の神さままつわる説話があります。

「昔々、冷泉院の御代(九六七〜九六九)天下に咳病が流行した。その時、とある料理人の前に赤い装束を着た伴大納言(伴善男)という人の霊があらわれ、「私は生前思わぬ事で罪を犯し、伊豆へ配流されその地で没し、今では疫病神となったが、生前は国からも恩を受けた。そこで、本当はもつと重病が流行し国中の人間が死ぬところを、咳病に抑えたのだ」と言って消えた」というお話です。そこから咳の神様は伴大納言といわれたそうです。

現代では先人の努力によって殆どの疫病は治療が可能になりましたが、近年エボラ出血熱や新型インフルエンザのような恐ろしい感染症が現れた事で、これまでとは状況が異なってきたております。恐らく平安時代の人々もこういった恐ろしい疫病に対する恐怖を常に持っており、それが疫病神のはからいで咳に変わったのだという説話は、当時の人に大きな心の安心を与えたものだったのではないかと思えます。咳一つにも命の有り難さを噛み締めた先人の心に思いを致し、いま咳に悩む皆様にはご自愛をと祈るばかりです。

重陽の節句

九月九日は古来より「重陽の節句(ちようようのせつく)と呼ばれます。重陽とは、陽の気を持つ奇数のうち最も数が大きい九の月日が二つ重なる事からこの名称があります。

この日は旧暦でいえばちようど菊の花咲く季節である事から菊の節句ともよばれ、長寿を願う菊酒が振る舞われ、若やぎを願う「菊の被綿(きくのきせわた)」という行事も行われ、女性に喜ばれた節句であったようです。

現代は太陽暦になった為、菊の季節と外れてしまっていますが、季節を楽しむという日本人ならではの感覚を大事にしたいものです。

室戸台風 八十年

近年、局地的な豪雨災害が頻発し、防災への関心が大変高まっておりですが、この関西において防災の意識を大きく向上させるきっかけとなった、第一室戸台風の上陸から今年で八十年になります。

第一室戸台風は昭和九年九月二十一日午前五時頃、高知県室戸岬付近に上陸。上陸時の中心気圧は九一ミリバルで、上陸時の気圧としては史上最も低く、最大瞬間風速は六十メートル(この後観測機が故障した為さらに強かった可能性もある)を記録し、約三千名の死者行方不明者を出した、とてつもない台風でした。

この台風では、暴風と高潮による被害が特に甚大で、大阪府内の二四四校ある小学校のうち、木造小学校一八〇校四八〇棟が暴風により全壊、半壊、大破し、児童等二六七名が死亡、一五七一名もの重軽傷者を出し、また、あまりの突風に四天王寺の五重塔が倒壊するなど大変な被害となりました。

当地梅田においてもその暴風被害は凄まじく、太融寺さんでは仁王門が半壊し、当宮では本殿、楼門が破損し、社務所の瓦が吹き飛ばなどの被害があり、『大阪市風水害誌』の社寺被災一覧によれば、被害額は一万円(現代の価値で約一六八〇万円)であったと記録されています。

また高潮は、低気圧によりせりあがった海水が、暴風によってまるで津波のように襲いかかるもので、この時はなんと大阪城のすぐ近くまで海水が流入し、溺死者の数は一九〇〇名以上といわれています。

この室戸台風以降、大阪の防災は大きく進み、現代では水害による被害は減多にありませんが、近年の突発的な豪雨による災害を見ていると、決して災害は忘れてはならぬものと、日頃の備えを大切にしたいものです。

神社携帯サイトのQRコード

ドコモ、ソフトバンク、
au、モバイルPC 対応



編著 網敷天神社 禰宜(神主)

白江 秀知

